

911.108B713

説教必携
先徳詠歌

定價拾五錢

浄林房弁恵編輯

釋教玉林和歌集

国立国会

2610

集

京都書林

三書堂

浄土真宗玉林和歌集卷第一

春

春の光りもよみもあはれなるそらに
花の影もよみもあはれなるそらに

夏

夏の光りもよみもあはれなるそらに
花の影もよみもあはれなるそらに

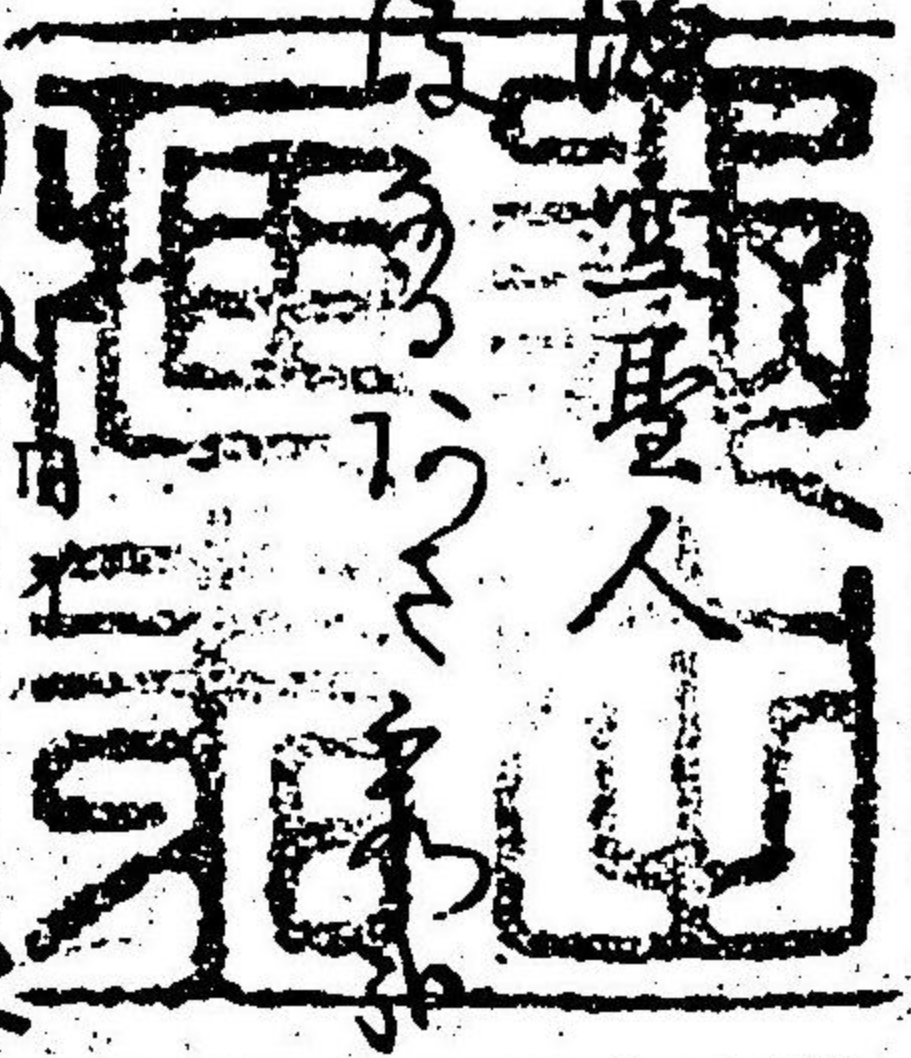
秋

秋の光りもよみもあはれなるそらに
花の影もよみもあはれなるそらに

冬

冬の光りもよみもあはれなるそらに
花の影もよみもあはれなるそらに

逢佛法捨身命



同
申
申れてはまづあひかんたはらふらまじりなれよと
夫木申
りてはまづあひかんたはらふらまじりなれよと
以上御自筆記

以上御自筆記

禪園内諸点と送るにふりてはまづあひかんたはらふらまじりなれよと
わらじのそりてはまづあひかんたはらふらまじりなれよと
やとあひかんたはらふらまじりなれよと

同
あのみつらういふてはまづあひかんたはらふらまじりなれよと
六字名号の眼ふ
あしてはまづあひかんたはらふらまじりなれよと
善信上人はまづあひかんたはらふらまじりなれよと

極くいひにらうて感ふなりと申るはまづあひかんたはらふらまじりなれよと
これ三河の妙法寺あり

と人術を教へてはまづあひかんたはらふらまじりなれよと
物象の本とて是をわらうてはまづあひかんたはらふらまじりなれよと
申のりてはまづあひかんたはらふらまじりなれよと
いづりてはまづあひかんたはらふらまじりなれよと

十巻傳

わらうてはまづあひかんたはらふらまじりなれよと
又袂頭の夏かといふは

まづあひかんたはらふらまじりなれよと
横州のまづあひかんたはらふらまじりなれよと

Handwritten text in Arabic script, likely a list or index, enclosed in a rectangular border. The text is arranged in approximately 15 vertical columns, reading from right to left. The script is a cursive style, possibly Maghrebi or similar, with some characters that are difficult to decipher precisely. The text appears to be organized into sections or entries, possibly representing a catalog or a list of items.

Handwritten text in Arabic script, likely a list or index, enclosed in a rectangular border. The text is arranged in approximately 15 vertical columns, reading from right to left. The script is a cursive style, possibly Maghrebi or similar, with some characters that are difficult to decipher precisely. The text appears to be organized into sections or entries, possibly representing a catalog or a list of items.

一 九未傳
 二 九未傳
 三 九未傳
 四 九未傳
 五 九未傳
 六 九未傳
 七 九未傳
 八 九未傳
 九 九未傳
 十 九未傳
 十一 九未傳
 十二 九未傳
 十三 九未傳
 十四 九未傳
 十五 九未傳
 十六 九未傳
 十七 九未傳
 十八 九未傳
 十九 九未傳
 二十 九未傳
 二十一 九未傳
 二十二 九未傳
 二十三 九未傳
 二十四 九未傳
 二十五 九未傳
 二十六 九未傳
 二十七 九未傳
 二十八 九未傳
 二十九 九未傳
 三十 九未傳
 三十一 九未傳
 三十二 九未傳
 三十三 九未傳
 三十四 九未傳
 三十五 九未傳
 三十六 九未傳
 三十七 九未傳
 三十八 九未傳
 三十九 九未傳
 四十 九未傳
 四十一 九未傳
 四十二 九未傳
 四十三 九未傳
 四十四 九未傳
 四十五 九未傳
 四十六 九未傳
 四十七 九未傳
 四十八 九未傳
 四十九 九未傳
 五十 九未傳
 五十一 九未傳
 五十二 九未傳
 五十三 九未傳
 五十四 九未傳
 五十五 九未傳
 五十六 九未傳
 五十七 九未傳
 五十八 九未傳
 五十九 九未傳
 六十 九未傳
 六十一 九未傳
 六十二 九未傳
 六十三 九未傳
 六十四 九未傳
 六十五 九未傳
 六十六 九未傳
 六十七 九未傳
 六十八 九未傳
 六十九 九未傳
 七十 九未傳
 七十一 九未傳
 七十二 九未傳
 七十三 九未傳
 七十四 九未傳
 七十五 九未傳
 七十六 九未傳
 七十七 九未傳
 七十八 九未傳
 七十九 九未傳
 八十 九未傳
 八十一 九未傳
 八十二 九未傳
 八十三 九未傳
 八十四 九未傳
 八十五 九未傳
 八十六 九未傳
 八十七 九未傳
 八十八 九未傳
 八十九 九未傳
 九十 九未傳
 九十一 九未傳
 九十二 九未傳
 九十三 九未傳
 九十四 九未傳
 九十五 九未傳
 九十六 九未傳
 九十七 九未傳
 九十八 九未傳
 九十九 九未傳
 一百 九未傳

六方の位佛と護命と
 七難と
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

。 。 。 。 。 。 。 。 。 。 。

はまにまのあひまふりあたりたのちほまあふく
を清れとぬる月夜かへりてあひま

ちりささこまひひたりたをちりすもあまはにわて
久慈の善念房水戸横河まへて空入とえさう
まのちりくしりちりけたりし居のなるわうら
枯のよれちりてあひま

あつちのちりてはちりてあひまのちりてあひま

焼場は後徳とらへりて三國傳あはれは地の

き像よじりてあひま

あつちのちりてはちりてあひまのちりてあひま

と海とてちりてあひまのちりてあひま

布地あつちのちりてあひまのちりてあひま

ちのちりてあひまのちりてあひま

ちのちりてあひまのちりてあひま

ちのちりてあひまのちりてあひま

ちのちりてあひまのちりてあひま

ちのちりてあひまのちりてあひま

新編集

神の徳はあつたてふよりまじくおぼしむり
いふせんせむくちのさうおぼしむらうのふ
よおしむらうのさうおぼしむらうのふ
徳のさうおぼしむらうのさうおぼしむらうのふ
なごてあつたてふにさうおぼしむらうのふ
先法

續古今

續拾遺

さうおぼしむらうのさうおぼしむらうのふ
まじりぬらうのさうおぼしむらうのふ
唯因法師 俗名田原

新編拾

水手遊川 水手遊川

善念法師 久遠の善念法師

らうの善の徳のさうおぼしむらうのふ
を人おぼしむらうのさうおぼしむらうのふ
ちのさうおぼしむらうのさうおぼしむらうのふ

明法法師 徳本の明法法師

らうのさうおぼしむらうのさうおぼしむらうのふ
を人のさうおぼしむらうのさうおぼしむらうのふ

善方信法師 徳本の善方信法師

徳のさうおぼしむらうのさうおぼしむらうのふ

これ消るふくたえけりなる

あだかゝきで送るこほりりのおもてたじき

難康々者よりくるふ法華後法降ぬの

吾滅後悪世能持是後者のころと

ふらふのわりのあつたじとてけつくとせよらん

付老胡臣のまよりちまへの花もてまらん

思ふもくちえんらんりのあつたじとてけつくとせよらん

いふふ若うはうえんもわびとまねてらよめまらん

實名々執竹の法華能持ふのころと

あつたじとてけつくとせよらん

心外無別法のころと

かみくけけちとてまあにまへんひんとあつたじと

佛心者大慈悲是のころと

あつたじとあつたじとてまあにまへんひんとあつたじと

生死涅槃猶如夢とよらん

あつたじとあつたじとてまあにまへんひんとあつたじと

臘月の如實事とよらんつらつたに「後光た」亞相おぼる

入る花税とまへん家替へましけりなる

のあつたじとあつたじとてまあにまへんひんとあつたじと

為世々言葉集と撰せられハ粉撲お撰て

信實如及...
くるとあまうりてほとちりていふ

あまうりてほとちりていふ

くるとあまうりてほとちりていふ

山花

存覚法師

あまうりてほとちりていふ

帰雁

あまうりてほとちりていふ

神祇

あまうりてほとちりていふ

あまうりてほとちりていふ

辞世 念除陀佛今詣西方

あまうりてほとちりていふ

くるとあまうりてほとちりていふ

山花

徳光法師

あまうりてほとちりていふ

帰雁

あまうりてほとちりていふ

神祇

あまうりてほとちりていふ

貞和三年八月初日水持の妹ねと嚴師ノ

きん嚴師ノ

表のそとさしよきぬ菟菴のなましめりてはく

光ちまきよの二三よに

あて寄りてゆかりにあらはるるにちぬ余ぐり

中納言雅康々の後室ノ送りけりある

まじりぬあつたふくぬお月にしるるわきよはそはら

師太玉宗玉林和歌集卷第一

師太玉宗玉林和歌集卷第二

無仁元仲白の八月後給ふる九青 蓮如上人

もよほしうらふきまるはまど留いしんくせんよん

かぢてらふそのにのち花笑てももいやはけふ病からるなをり

あけられた信むらうふたごさそはのまどふうくおのを

信むらたご一すらの老本くしよそめとすれが老うりあり

又母の想よらうくもいづーそごたのひるにそごてあつ

林やけおぬぬなぬ歌おづちやうわいもあーちん

ちばいしづいづいよんぬらふるちんらうけし世やあ

又母に思ふ南きいぬらふちんへのしよつらうのあつ

又母の扱本はくくゆびも茶臼をかたてしりてまき

彦仁二年春を伴向のころより九州を平部

人はのきより母のあし紀伊のまき野に一人の

希ふ和明吉野の真十は川のながれ鬼ヶ塚と

とくちりゆりし時籠りなるまき野にまき

る野にまき野にまき野にまき野にまき野にまき

十はくく田井のまき野

真吉野まき野にまき野にまき野にまき野にまき

十はくくまき野にまき野にまき野にまき野にまき

まき野にまき野にまき野にまき野にまき野にまき

十はくくまき野にまき野にまき野にまき野にまき

まき野にまき野にまき野にまき野にまき野にまき

まき野にまき野にまき野にまき野にまき野にまき

十はくくまき野にまき野にまき野にまき野にまき

まき野にまき野にまき野にまき野にまき野にまき

まき野にまき野にまき野にまき野にまき野にまき

まき野にまき野にまき野にまき野にまき野にまき

まき野にまき野にまき野にまき野にまき野にまき

十はくくまき野にまき野にまき野にまき野にまき

まき野にまき野にまき野にまき野にまき野にまき

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines within a rectangular frame. The script is dense and characteristic of early modern European handwriting.

きつたれり 釋中々のあく 隆寛律師

Handwritten text in Kuzushiji script, likely a letter or document, starting with a large character that resembles 'あ'.

Handwritten text in Kuzushiji script, continuing the letter or document.

信堂上人 中興の信

Handwritten text in Kuzushiji script, including a signature and possibly a date or location.

新後天 新後天 新後天 新後天 新後天 新後天 新後天 新後天 新後天 新後天

法苑珠林 法苑珠林 法苑珠林 法苑珠林 法苑珠林 法苑珠林 法苑珠林 法苑珠林 法苑珠林 法苑珠林

石の光力に教をて 聖なるくまんのやまにけられし

よとまのころの修りのつらいたちのうらやま

ゆるるる者のしきもあつてまぢなる

月 月 月 月 月 月 月 月 月 月

はのまよと世の渡のしとまのまよとあつたまよと

くわんくんのねえの目まよとあつたまよとあつたまよと

觀無量壽經 觀是諸佛無量壽佛住立空中

新後天 新後天 新後天 新後天 新後天 新後天 新後天 新後天 新後天 新後天

入る教王なるまよとあつたまよとあつたまよと

秋とまよとあつたまよとあつたまよとあつたまよと

まよとあつたまよとあつたまよとあつたまよと

まよと

月 月 月 月 月 月 月 月 月 月

けのまよとあつたまよとあつたまよとあつたまよと

けのまよとあつたまよとあつたまよとあつたまよと

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

はのまよとあつたまよとあつたまよとあつたまよと

うのまよとあつたまよとあつたまよとあつたまよと

新後天

秋萩のまへちりりるるのあはれをわらわらとて 鹿をなごころ
うりやとて萩の下の葉のまへちりりるるのあはれをわらわらとて

水想観

新及様

水はつらつらと流るるをみれば 冬はけしきあはれ
人の心もつらつらと流るるをみれば 春はけしきあはれ

あはれをみれば 秋はけしきあはれ
あはれをみれば 冬はけしきあはれ

月夜の中ふ

里のあまのほろけをみれば 月夜の中ふあはれをわらわらとて
あはれをみれば 月夜の中ふあはれをわらわらとて

秋萩のまへちりりるるのあはれをわらわらとて

秋萩のまへちりりるるのあはれをわらわらとて
あはれをみれば 秋萩のまへちりりるるのあはれをわらわらとて

あはれをみれば 秋萩のまへちりりるるのあはれをわらわらとて

あはれをみれば 秋萩のまへちりりるるのあはれをわらわらとて

あはれをみれば 秋萩のまへちりりるるのあはれをわらわらとて

あはれをみれば 秋萩のまへちりりるるのあはれをわらわらとて

あはれをみれば 秋萩のまへちりりるるのあはれをわらわらとて

あはれをみれば 秋萩のまへちりりるるのあはれをわらわらとて

其の終つては後流の流す
其不入の流す
連生は師 其の流す

其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す

其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す

其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す

其の流すは其の流す
其の流すは其の流す

其の流すは其の流す
其の流すは其の流す

其の流すは其の流す
其の流すは其の流す

其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す

其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す
其の流すは其の流す

Handwritten text in a cursive script, likely Arabic or Persian, enclosed in a rectangular border. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines. The script is dense and fluid, with some characters appearing to be ligatures. There are several small circles or dots interspersed within the lines of text, possibly serving as markers or decorative elements. The overall appearance is that of a manuscript page.

Handwritten text in a cursive script, likely Arabic or Persian, enclosed in a rectangular border. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines. The script is dense and fluid, with some characters appearing to be ligatures. There are several small circles or dots interspersed within the lines of text, possibly serving as markers or decorative elements. The overall appearance is that of a manuscript page.

一、我々も我々も...
 二、...
 三、...
 四、...
 五、...
 六、...
 七、...
 八、...
 九、...
 十、...

一、...
 二、...
 三、...
 四、...
 五、...
 六、...
 七、...
 八、...
 九、...
 十、...

五谷傳

三十一

付料のちた料他えんてはひさる傍りのきんか車
大端とる物率うりよしんかひんたのちのよんかじ
なふまうてけふ浴養あむしあひらぬいては終率
のさるさあふ料他てはひさる傍りのきんか車
のさるさあふ料他てはひさる傍りのきんか車

沙ん集
極らくんまんのりてはひさる傍りのきんか車
地蔵のりては
極らくんまんのりてはひさる傍りのきんか車
善授ちの儀養のりてはひさる傍りのきんか車

新衣
きんか車はひさる傍りのきんか車
け新一候より木よ掛更神と儀へもひさる傍りのきんか車
後より一の起あふんてり

天照太神

はひさる傍りのきんか車
きんか車はひさる傍りのきんか車
きんか車はひさる傍りのきんか車

はひさる傍りのきんか車
きんか車はひさる傍りのきんか車
きんか車はひさる傍りのきんか車
きんか車はひさる傍りのきんか車
きんか車はひさる傍りのきんか車
きんか車はひさる傍りのきんか車
きんか車はひさる傍りのきんか車
きんか車はひさる傍りのきんか車
きんか車はひさる傍りのきんか車
きんか車はひさる傍りのきんか車

○ 蘇野權現

蘇野權現

○ 蘇野權現

○ 蘇野權現

○ 蘇野權現

蘇野

○ 蘇野權現

白山權現

○ 白山權現

白山權現

○ 白山權現

○ 白山權現

翁根權現

○ 翁根權現

宇佐八幡

○ 宇佐八幡

小野天神

○ 小野天神

多摩入神

○ 多摩入神

換

新

的

徒

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

乃

一

雜

奏

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

奏

雜

○ 老の老を以てしては、
○ 老の老を以てしては、

○ 老の老を以てしては、
○ 老の老を以てしては、

○ 老の老を以てしては、
○ 老の老を以てしては、

○ 老の老を以てしては、
○ 老の老を以てしては、

○ 老の老を以てしては、
○ 老の老を以てしては、

○ 老の老を以てしては、
○ 老の老を以てしては、

○ 老の老を以てしては、
○ 老の老を以てしては、

○ 老の老を以てしては、
○ 老の老を以てしては、

○ 老の老を以てしては、
○ 老の老を以てしては、

○ 老の老を以てしては、
○ 老の老を以てしては、

不佞盜

ほろびし一葉のりしも 盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

不邪淫

日 盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

不妄語

佛は捨 盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

不飲酒

日 盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

盗みしは 盗みしは 盗みしは 盗みしは

五七

三

0 0 0 0

0 0 0 0

曉のまはりのまはり

日 夢あはる後めらまおあそて十たのComaのComa

あそとち人因まそててんたをあつたまらるはま

女房大捕りまくりのちをさうてまてててててて

おはしむじまはる井のまはるまはるのちをさうてててて

ウー

てんたまはる井の水のちをさうてててててててて

よのこくと作を入るまてててててて

うのほにまはるまはるの目たててててててててて

カ

大の勢

日 我んちをか木とちをさうてててててててて

又てねたり入るのちをさうててて

日 法まよとちをさうててててててててて

ウー

仲ははるまはるまはるのちをさうてててて

日 あへりまはるのれりててててててててて

日 ういふまはるまはるまはるのちをさうててて

日 西へらるの目たてててててててててて

日 運まよとちをさうててててててててて

てんたまはるまはるまはるのちをさうててて

BTW

六極ふつ...
 七念も命も...
 八万のは...
 九...
 十...

律書...
 律書...
 律書...

各宗書籍調進所

京五条通高倉東へ入

澤田友五郎

七祖聖教 小本 三冊

三部經延書 月 三冊

教行信證延書 月 六冊

黒谷語燈録 月 五冊

漢語燈録 月 七冊

百通切紙 月 四冊

此書ハ真宗ノ故奥ヲ百ヶ条書キ立テ二
 問答ヲ設ケテ辨解シタレハ普流ノチカシラヌ
 人々ハタトヒ在家ノ人多ク必ズ誦スキ書ナリ

唯識同學鈔 大本 全三十五冊

此書近來製本之クテ看客ノ御用向テ今
 候ヲ數キ今般組合申合セ多分ニ立テ製
 本仕候間代價モ随テ下直ニ差上申スベク候

雜談集 小本 五冊

此書ハ無住法師年来諸宗ノ大綱ヲ伺ヒ
 佛教ノ深理ヲ悟リテ事ヨリ世間ノ因果應
 報ノ道理故事因縁等スヘテ勸善懲惡ニ便
 リアル佛道ニ進修モシタルヲ記載セラレハ
 説教者ノ助トナル因ヨリ諸人誦テ有益會也

釈教玉林和歌集 小本 全一冊

此書ハ佛法ノタウトキ一念佛ノアノガ多
 一トナトヲ安ラカニヨミツラ子タハ女子共至
 ンデワカリヤスケテ信心ヲ増ス重宝ノ書ナリ

五帖 御文略解 香月院述 小本 五冊

此書其意如上人御生涯御勸化ノ骨目多御文ニ付テ一通々々其由来及ビ御詞ノ解ガ多ク所ヲヨク會得セシムル書ナリ朝夕御多ク拝読スルハ必ス誦ミテ其不審ヲハラシイテ信心決定スベキ階梯トナル有カキ書ナリ

御文明燈鈔 釈道隱述 小本 十五冊

御文記事珠 理綱隱述 小本 六冊

御文寸珍 大行寺述 半紙本 十五冊

此書ハ五帖一部ノ御文ヲ一通々々ヨク解シヤスキヤウニ平仮名ニテサマシク因縁等ヲ引キテヤウラカニ説キ述ズレバ在家ノ人々女子共ニ至ルマテ誦ミヤスルテ而モ信心ノイロヲ増ス世ニ有カキ書ナリ

大原問答勸導 大行寺述 小本 三冊

此書ハ昔シ法然上人諸宗ノ學者達ト佛法ノ大義論アリシ念佛ノ諸法ニスグレシト同一感服セラレシ趣ヲ説キ演タル有カキ書也

歸命字訓勸誘錄 野村清述 命之釈 三冊

此書ハ歸命ノ御字訓ノ中歸ノ釈ハ先キ三渥美契華師講弁セラレシ書アリトイヘイマダ命ノ釈ノ書キキヲ歎キ野村清師ニ謀リテ全備セラレタレバ眞宗ニ流シクム人々ハ必ズ誦ミテ祖師ノ深意ヲヨク了解ス事ナリ

說教故事因縁集 大島金述 小本 三冊

此書ハ說教ニ引用スベキ故事因縁等ヲ數多記載シ或ハ法三合釈セシモアレハ何宗ニカキニス法席ニソシテ演説ノ一助トナナリスベテ勸善懲惡飯入佛教ヲ旨トスルノ書ナレハ諸人ノタメ大ニ利益アリト云

說教書略目錄

京五條通高倉東五ノ

澤田友五郎藏版

勸導薄照 智洞述 十冊 小夜中山靈驗記 欣譽述 五冊

說法百華園 同 五冊 三文録八十余座 智洞述 三冊

說法巍巍々編 同 五冊 一枚御消息演義録 宣陽隱述 五冊

勸化論語 同 三冊 此書ハ照谷上人ノ一枚起請文ノ義趣ヲ委シク解セシメシガ為ニ譬喩因縁等ヲ引

要言斷擬本 同 四冊 此書ハ演々タル說教者ノ心得必用ナル論

說法大因縁集 同 十二冊 說山房夜話 聖宗隱述 二冊

同續集 同 十二冊 此書ハ三條ノ御教則ノ趣ヲ因縁事等ニ託シテ説シタル說教ノ為ニ必誦スベキ書ナリ

御傳演義鈔

義書著

十三冊

阿弥陀經依止談

義書著

六冊

即席法談空旨

同

三冊

四十八願喚鈔

同

十冊

同大經讀二音

同

三冊

御式文述讚

同

四冊

同觀小讚十首

同

三冊

袖珍勸考

同

一冊

高僧和讚瀉瓶錄

同

二冊

同勸錄

同

一冊

帳中五座法談

同

二冊

勸序考

同

一冊

卷懷五座法談

同

二冊

通三世因果實驗錄

本法儀著

四冊

一枚起請說教

同

三冊

此書通書來現在因果成報之道理委多說教者為三必用之空冊也

因緣唱導譬喻錄

在寺錄

三冊

歎異鈔法話

大玄述

三冊

三誓偈宣唱錄

灌頂錄

三冊

口傳鈔教人錄

同

三冊

同續篇

同

三冊

四季唱導編

同

二冊

歸命字訓勸誘錄

同

三冊

和真俗佛事編

生寺筆述

六冊

同後篇

命之類

三冊

此書八堂塔並供養音樂流灌頂施餞鬼石塔婆裝裝珠數功德年忌追福回向開眼六地藏十二佛拜禮壇場葬式惣之佛事二關スル事件說教心得子ル必用之空書ナリ

說教譬喻辨

大行寺說

初篇三冊

次篇續出

此書八堂無者之信深要之為三ヨリ會集之法三種之說之說教者用重

百因緣集

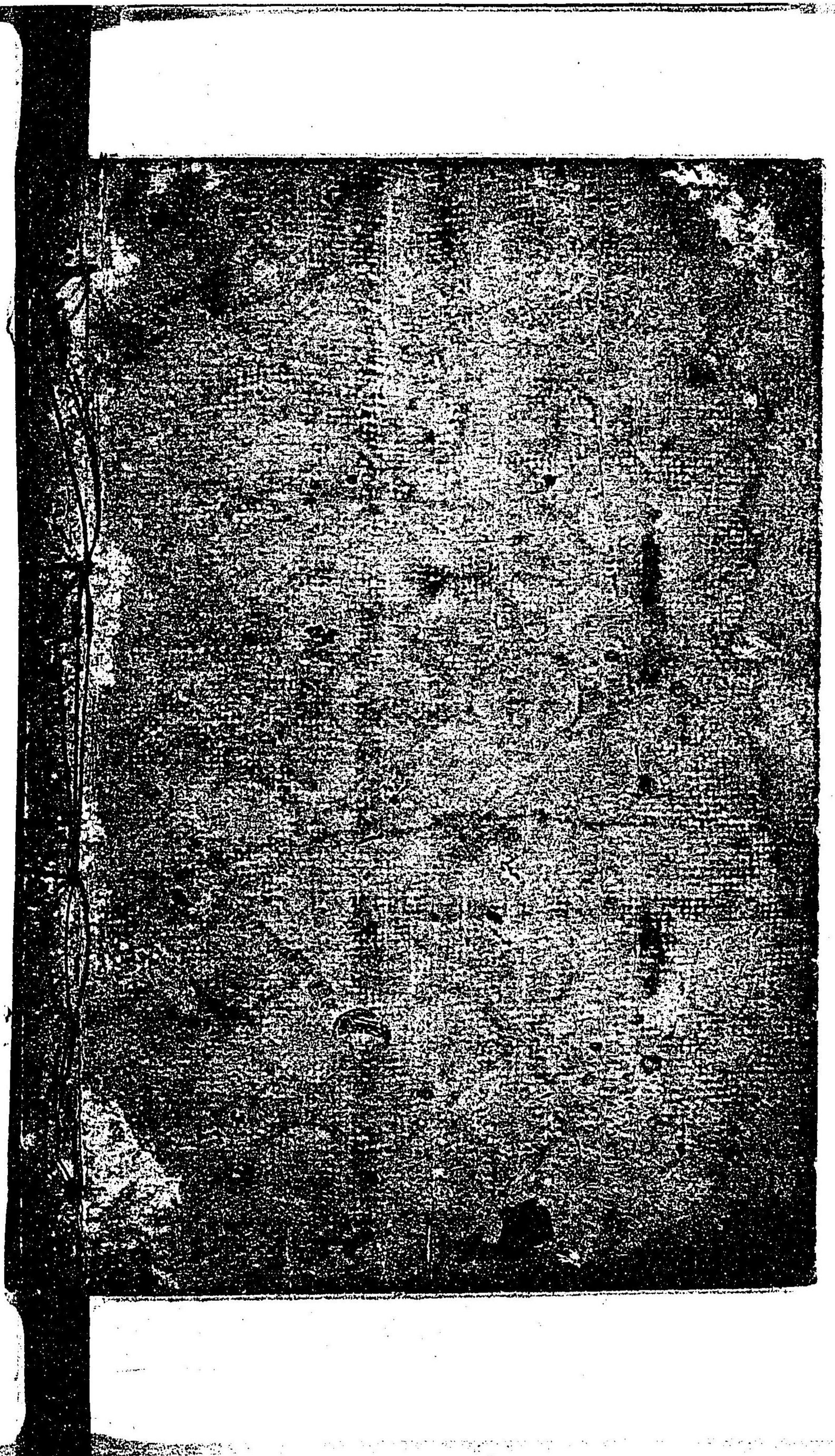
十冊

西京書林

友

五条通高倉東三入

澤田友五郎版



浄土真宗玉林和歌集

086114-000-2

911.108-B71z

浄土真宗玉林和歌集

弁恵/編

〔刊年不明〕

DBD-0813



911.108
B71z